

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	教育実習の思い出 〈一般〉
Author(s)	随木, 幸恵
Citation	広大言語 , 11 : 45 - 47
Issue Date	1971-12-06
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046380
Right	
Relation	



僕の友人に言った。

僕はさっと立ち上がり、カロロスの両腕をつかまえ、落着かせようとした。彼はぐいと身体を動かし、腰からピストルを引きぬいて僕の胸にそれをつきつけた。だがすぐに次の動作でピストルをケースにおさめた。そして、目の前にあった椅子を蹴とばし、急ぎ足で扉を開き、姿を消した。彼が走り去るとき、彼の怒った眼から一にぎりの火花が食堂中に飛び散るように僕には思えた。われわれは棒のように硬くなって席に坐ったまま、声をなくしたかのように顔だけを見合わせていた。手は萎えてしまっていた。葡萄酒をなみなみとついで杯を残したまま、黒い襟を立てて、われわれはつぎつぎと扉を排し、とび込むように闇の中へ、深淵の中へと1人づつ姿を消して行ったのだ。》

す

ニキフォロス・ヴレタコスについて

Nikiphoros Vrettakosは1911年にスパルタ南方のクロケア村で生まれた。ごく若いときから特異な詩的天分を示し、イシオンのギムナシオンの生徒のとき、すでにいくつかの詩を作った。アテネに出て法律を学んだが、かたわら詩作にふけり、それらを“影と光の下に”と題する処女詩集として1929年に出版した。その後、多数の詩を定期刊行物に掲載し、また詩集にまとめて世に出した。人間的情感と問題性にと富むと言われる彼の詩は、英・仏・露・独・伊その他の言語にも訳され、シケリアノス、カザンツァキス、セフェリスなどと並ぶ現代ギリシア屈指の詩人と彼は目されている。散文作家としては余り名をなしていないが、上に訳出したものは彼の多くはない短篇小説の代表作の1つであるのだろう。この中で作者は何を言わんとしているのか、——第2次大戦下、ドイツ軍の占領下にあったギリシア民衆のみじめな立場をか、あるいはむしろ占領軍人の心の奥の悲哀をか、さらには「1個の人間」が、民族・階級そのほかさまざまな「集団の中の人間」となったとき（それを意識したとき）、人間の中に生じるやるせない疎外・被疎外の深淵をか——あれこれと考えさせてくれる小品ではある。（J. O.）

教育実習の思い出

随 木 幸 恵

6月に中学、高校で2週間、実習をした。中2を2時間、中3を1時間、高1のグラマーを1時間、高2リーダーを2時間、高3リーダーを1時間、計7時間の授業を受け持った。実習をする前に、付属の生徒は教生いびりがじょうずだといううわさを耳にしていたので、授業するのが、少し恐ろしかったが、生徒の方は、彼らと年のあまりちがわない我々実習生の未熟な授業を、年行事の1つとでも考えているらしく、楽しんでいる様子であった。高2のあるクラスでは、授業時間中、先生が出張のため教室を出て行かれるとすぐ、「質問があります。」と言って、1人の生徒が手を

上げた。すると、あっちでもこっちでも、同じように「質問があります。」と生徒が手を上げ、前時間のことや、中には1週間³前の接続詞のことを質問し始めた。指導の先生もういらっしやらないし、後で授業を観察している実習生達も、ただニヤニヤするだけで誰も助けてくれない。ただ1人教壇に立たされ、孤独をかみしめ(?)て、奮闘したが、結局、「あとで〇〇先生に聞いて下さい」と、逃げてしまった。高3の受け持ったクラスの生徒達は、みなやる気のない者ばかりで、中には授業中にまんがを読んでいる者もいた。仲間の実習生の授業を観察してみて、このクラスの生徒はみんなどうしてやる気がないのだろうと、腹立たしく思い、私が授業をする時には、まんがの本なんか読ませないと、1人意気込んで授業にのぞんだ。私の熱意(?)が通じたせいか、授業中、生徒達から、かなり活発に意見が出た。どうにかこうにか授業を済ませたあと、一度に気が抜けて、がっくりした。「あんな皮肉なんか言わなければよかった。生徒から、あの教生は生意気だと反感をかわれたのでは……………」と後悔したが、反省会の時先生から、「あのクラスの生徒が、あんなにやる気になっていたのは珍しいことですよ。よくやりましたね。」と言われて、努力がむくわれたようにうれしく思った。

中・高での2週間の実習、いろいろ失敗ばかりしていたが、生まれてはじめて、何十人もの生徒を前にして教える立場に立ち、教えることのむづかしさを身にしみて感じた。いつもTVを見てばかりいる私が、実習期間中は、ほとんどTVも見なくて、次の日の予習のため、毎日、夜遅くまで起きていた。教師になるつもりはないが、せっかく大学に入ったのだから資格だけでもとろう。そんな安易な気持ちで、実習を始めたが、実習が終る頃には、本当に教師になりたい気持ちになった。

10月に入って、今度は小学校で、1週間の実習をした。私の受け持ちは1部5年であった。算数(百分率)と国語(詩)の2時間の授業を担当した。小学校の場合は、中・高ほど予習に時間がかからなかったが、相手が小学生なので、使用できる語彙が限られており、抽象的なことは理解できないし、生徒にわかりやすい授業をする必要がある。私の国語の授業のあとで、1人の生徒が私に、「先生の授業はむづかしかった。」と言った。授業中、生徒の反応が少ないので、私の言っていることが理解できないのだなとうすうすは感じていたが、こう、はっきり口に出されると、少しショックだった。もっと、生徒の立場に立ち、言葉使い、発問などを考え、生徒の発言も取り入れて授業するべきであった。

この、小学校の実習では、授業中のことより、休み時間などに、生徒と話をしたり、遊んだりしたことが印象に残っている。生徒と一緒に弁当を食べた時、ある生徒から、「先生のタッパは安い日本製のだね。ボクの家のは、外国製で20年保証がついてるんだよ。」と言われ、次の日から、別の弁当箱を持って行ったこともあった。また、学級会の時間に、女子と陣取り遊びをしたことも思い出に残っている。1週間の実習の最後の日に、生徒達がお別れ会をしてくれた。まず、クラス委員の子が、例の卒業式の答辞のようなものを述べ、そのあと、皆で、実習中の思い出を語り合ったり、歌をうたったりして1時間を楽しく過ごした。たった1週間の付き合いだったが、彼らと別れる時には、悲しくて、後髪をひかれる思いであった。お別れ会の時、生徒達から手紙をもらった。その中に、手をけがして針もぬった生徒からの手紙もあった。「先生、みじかい手紙で、がまん

してください。手がいたいのですから。先生は家庭科の時間に、はりをとってくださってどうもありがとうございました。いつか学校へ来て下さい。」(原文のまま)と、たどたどしく書いてあった。差出人の名前さえ書いてない、簡単な4、5行足らずの手紙。手がいたいのに、針を取ったことぐらいの礼を書いてくれて、そう思うと、胸に熱いものがこみ上げて来た。実習が終って、早くも2週間たったが、今でも、時々、むしろように生徒達がなつかしくなることがある。私もまた小学生に戻って、彼らと一緒に遊びたい、そんなできもしない事を考えたりする。小学生の頃、大きくなったら学校の先生になろう、と思っていた私であるが、結局、教師にはなれなかった。しかし、小、中、高、あわせて3週間の実習で、教師のまね事のような事を経験する事ができて、本当に良い経験になった。